

心で行動した結果、逆に周りの人に迷惑をかけたたりしたこともあります。また、私はどんなことも難しく考えてしまう癖があり、すぐに決断できずに結局、何もできないまま物事が終わってしまふことも珍しくありません。言ってしまうえば、私は優柔不断で視野が狭いという、どんな時代でも真つ先に死ぬ確率が高い人間なのです。歴史を遡っても、広い視野で物事を考えることができる人と、速断速決で動くことができる人が成功を収めています。現代では尚更それらの能力が必要だと思うので、しっかりと意識していきたいです。

たとえ、様々な逸話を残した戦いでもあります。彼は最初から最後まで敵や味方を自分の想定通りに動かし、見事に勝利を掴み取りました。彼がいなければ、それからの中国の歴史は大きく変わっていたでしょう。

最終巻まで読んだ後に私が最初に思ったことは、やはりどんな時代でも血みどろで醜い権力争いは起こるのだということですね。口では「全ては主君の為」と言いながら、実際は自分の権力を振りかざして好き勝手していた人物はかなり多かったのです。また、感情に流されて短絡的な行動を取った人物達は、その何れもが最後に痛い目に遭っているのです、冷静に、かつ客観的に物事の良し悪しを考えることの大切さを学ぶことができました。現にこの能力を備えていた蜀の諸葛孔明や、呉の総帥の陸遜はほとんどの戦いで勝利を

収めています。この能力があるか無いかで、今後の人生が大きく左右されてくると思うので、強く意識していきたいです。私は小中学生のときは感情のままに行動し、最終的には損をすることがほとんどでした。しかし、『三国志』を読んで感情的になることの無意味さを理解した後は大分落ち着き、問題もほとんど起きなくなりました。そのことを意識していることで、今は順調に高校生活を送ることができています。今以上に感情を抑制する必要がある社会に入るときのためにも、今後も『三国志』で学んだことを継続していきたいと思っています。

『三国志』(吉川英治、六興出版、一九九〇)



《一般成人の部》優秀賞

旅の魔力

時空を超えて深夜特急の著者に会いたい

麻生 浩哉

一番印象に残ったのは、三国志史上最も大規模であった「赤壁の戦い」です。現代でも天才軍師として地名度が高い諸葛孔明が、十万本の矢を三日で揃えたり、味方がいる方向に吹いていた風を敵がいる方向に吹かせ

この夏メルカリで6冊の本を売った。書架の一等いい場所に置かれていた大切な本であった

にもかかわらず。タイトルは沢木耕太郎著『深夜特急』。半世紀近く読み続けられている言わ

ずと知れた旅のバイブルである。何度読み返したことだろう、転職や人との別れなど人生での挫折を味わう度に一人旅に出てその傍らに置いていたのもこの本であった。でもそんな思い入れのあるものをたかがランチ一回分の値段でなぜ売ってしまったのか。断捨離と言うわけではない、ただこれからの自分にはもう必要のないものと思い込んでしまったのだ。

還暦を前にした今でもコロナ禍の隙間を縫ってあちらこちらと旅をする。先日そんな車中での会話、やれピースボートで世界一周だのキャンピングカーで日本中の温泉地を巡るのだと熱く語る私に対して、助手席の伴侶からは「旅のロマンより老後の2000マンだね」とあくまで冷静に繰り出される手痛いカウンターパンチ。確かにそうなのだ、60歳定年で豊かな第二の人生を歩めたのは遥か遠い昔の夢物語、70歳まで働いても年金受給さえ怪しくなってきた我々世代のハッピーリタイアメントには今もくもくと暗雲が立ち込めているのである。

企業戦士だった(と思っていた)若き日、あの頃は旅に出たくてもまとまった時間が全くもって取れなかった。それがどうだろう、あれほど欲しかった余暇なるものが手に入る目を目前にして今度は資金の壁が立ちはだかるとはなんたる皮肉。いやしかし待て、なんにも壮大にユーラシア大陸を横断することだけが旅ではないはず。大きな風呂敷を広げなくともフェリーにホンダのカブを積み込んで東北を目指すのも張り切ってヘルメットまで揃えたのに、最近は何が定位置のクロスバイクで琵琶湖一周するのもマインド溢れる立派な旅ではないか。だがしかしそんな大それたチャレンジをするための肝心の体力が果たして今のだらけきった私にあるのだろうか……。

ああもうダメだだめだ！本当に足りないのは資金などではなく、こうと決めたら一心不乱に行動する「旅の力」であるのに結局は加齢を口実にあれこれ理由をつけて何もせず臆病風に吹かれていただけじゃないか。それが現実と気づいてしまった自分が本当に情けない。

そこで本題である。今の私が会ってみたいのは現在の大先生となった沢木氏ではなく中東の砂漠をオンボロバスで駆け巡っていた頃の頬がこけ眼だけがギラギラ輝いていたあの深夜特急の沢木耕太郎青年。彼に会って活を入れてもらいたいのだ「マダ到着セズ」と。

飛光よ、飛光よ、我に一片の勇気を与えよ。

『深夜特急第一便』(沢木耕太郎、新潮社、一九八六)



審査講評

“実感”を大切に

国府 正昭

本年度のこのコンクール、応募数から見れば、小学生の部と中学生の部はほぼ横ばい、一般成人の部が増えたので全体としては微増という感じであったが、ここ数年、中学生の応募が少なくなったのが気になっている。学校現場が多忙化して、このような企画に取り組む余裕がなくなっているのかもしれないし、何より中学生自身があれこれと忙しく、落ち着いて読書に向かう時間がないのかもしれない。そうだとすれば、本に夢中になる経験が最も必要な時期であるだけに、寂しいことだと思う。

ただ、今年の応募作の中にもゲームや漫画に関するエッセイがあったように、「読書」という行為の間口が次第に広がっているのは感じる。そういうものを対象に書いた作品を最初から除外してはいないが、選ぶ方の感覚がいつて行っているのかどうか、我ながら心許ない気はする。

さて一般成人の部。横山美菜さんの作は、読書と日常の料理の経験を結びつけて書いていて、読んでいて楽しいし毎年のように応募してくださるベテランらしく上手い。文句なしの最優秀であった。池畑佳美さんの作も、一冊の本との出会いがコロナ禍を乗り越える糧になったと述べて

いて良い作品だった。高校生の吉田光佑さんは『三国志』を自分を照らす鏡として学んでいる。『深夜特急』について書いた麻生浩哉さんもおもしろかった。筆者が会いたかったのは、若き日の沢木耕太郎ではなく、若き日のご自分ではないのかと思いましたが……他にも、パニック障害について書いていた田中伸一さん、福井の歌人橘曙覧に会いたいという辻康さん、『君たちはどう生きるか』に取り組んだ岸本悠汰さん、懐かしい山本周五郎の短編集を楽しいエッセイに仕上げた藤田結さん、などの方々の作に魅力を感じたが、残念ながら選外とするしかなかった。

中学生の部、『枕草子』の世界に入り込み、清少納言が現代に現れたらと考えた瀬古紅葉さんの作が断トツにおもしろかった。数学に興味がある檜垣伊織さんは、自分にぴったりの本と出会えたようだ。『ファール昆虫記』の中の一節を詳しく読み込んだ加藤優奈さんの作はとても分かりやすかった。竹内杏凜さんの作からは『ハリー・ポッター』の中のある人物への「愛」がよく伝わってきた。

小学生の部では、今年のテーマ「あの本のこの人に会いたい」を『どうぶつのおぼけずかん』の中に求めた伊藤咲希さんのかわいらしい作を最優秀とした。加藤那奈さんは五年生らしくアンパンマンの表面だけでなく、その奥のものを探っている。山下弦輝さんは自分の感じたことを簡潔書きで分かりやすく書いています。栗木彩衣さんは小学生と言っても高学年らしい選書をしているし、しっかりした問題意識の芽を感じた。

総じて、一般成人の皆さんはそれぞれの体験や知識と結びつけて書かれた作が多く、読み応えがあつて楽しく選考できた。中学生や小学生の皆さんにアド

会えるよろこび

中山みどり

会いたい人に会えないコロナ自粛の日々、小学生の伊藤咲希さんが物語の中のおぼけに会いたいと書いているのに驚いた。平仮名の文章の中から感動が伝わってくる。

加藤那奈さんはやなせたかしさんに会ってアンパンマンに込められた意味を知りたいと、これもすごいね。山下弦輝くんも平仮名の文章だが、織田信長にほんとうに会っている感じが感じられた。栗木彩衣さんはグレッタさんを通して環境問題を真摯にみつめていた。昨年度、最優秀になった佐野雫さんもがんばっていたよ。

中学生の部で最優秀賞になったのは、清少納言に会いたい瀬古紅葉さんだった。清少納言に現代の日本の様子を尋ねられた時の瀬古さんの答に共感したね。優秀賞の三作も中学生らしい知性や感性が光っていた。数学

バイスをするのであれば、あるべき「型」のようなものに自分の思いを入れて行く方法ではなくて、自分の「実感」を出発点として、それをできるだけ分かりやすく人に伝える、そういう道筋で考えてほしいと思う。あなたが感じたこと、それが何より大切なものだと思います。皆さん、また来年も楽しみにしていますよ。

好きの檜垣伊織さんは博士に会い、博士の優しさを発見する。加藤優奈さんはファール先生のおかげでセミが好きになったそう。竹内杏凜さんは「ハリー・ポッター」に出てくる結婚しないで亡くなったスネイプにプロポーズするという。

青木千織さん、小林杏寧さんも入選に迫っていたことを付け加えよう。来年度を期待したい。さて、一般成人の部は人生の知恵が語られていて、惜しまれる作品が沢山あった。

その中で、昨年度に優秀賞をとられた横山美菜さんが最優秀賞となった。仕事をもち、忙しい日常の中で家族の夕食を作る生活感に共感した。短時間で作る食事にも愛情を確信できたのはすばらしい。

企業戦士だった麻生浩哉さんは加齢の体力不足を克服する旅のロマンを求めて、読み続けてきた『深夜特急』の著者に会いたいと語り、池畑佳美さんは、コロナ禍の中で読書を通して自

己の救済を試みていた。二作とも、充実していた。高校生の吉田光佑さんは、自分自身と『三国志』とを重ね合わせ、ユニークに素直に語っているところに好感を感じた。高校生の入選はうれしいことなので、来年度もぜひ挑戦してほしい高校生が何人かいた。

先述したように、割愛した作品がいくつかある。伊藤一幸さんも歴史に残る人物に会って、聞きたいと。成人の部の作品は私自身、学ぶことも多い。

いつも話していることだが、私は優等生のエッセイでなくていいと思っている。もちろん、誤字はなくしてほしいし、段落はつけてほしいし、規定の枚数にしていたかどうかという基本は大切だが、キラッと光る一行で、入選になったことも過去にはあった。巧みな文章力とは別に、読書と懸命につながっている姿に胸うたれたこともある。

重ねて応募される方もあつて、応募がないと、あの方はどうされているだろうと思うこともある。作品まで思い出すこともある。少年少女時代から応募を続けていた人たちは、どんな大人になったのかなと、それこそ私の会いたい人たちである。

読書に関するエッセー 入賞作品集 二〇二二

令和四年十二月発行
発行 四日市市教育委員会
編集 四日市市立図書館